

穴

岡本綺堂

青空文庫



Y君は語る。

明治十年、西南戦争の頃には、わたしの家は芝のうち高輪たかなわにあつた。わたしの家といつたところで、わたしはまだ生まれたばかりの赤ん坊であつたから何んにも知ろう筈はない。これは後日になつて姉の話を聞いたのであるから、多少のすじみちは間違つてゐるかも知れないが、大體の話はまずこうである――。

今日こんにちでは高輪のあたりも開け切つて、ほとんど昔のおもかげを失つてしまつたが、江戸の絵図を見ればすぐにわかる通り、江戸時代から明治の初年にかけて高輪や伊皿子いさらごの山の手は、一種の寺町といつてもいい位に、数多くの寺々がつづいていて、そのあいだに武家屋敷がある。といつたら、そのさびしさは大抵想像されるであらう。殊に維新以後はその武家屋敷の取とりこわ毀されたのもあり、あるいは住む人もない空屋敷あきやしきとなつて荒れるがま

まに捨てて置かれるのもあるという始末で、さらに一層の寂寥せきりょうを増していた。そういうわけであるから、家賃も無論にやすい。場所によっては無銭同様のところもある。わたしの父もほとんど無銭同様で、泉岳寺に近い古屋敷を買い取った。

その屋敷は旧幕臣の与力よりきが住んでいたもので、建物のほかに五百坪ほどの空地あきちがある。

西の方は高い崖がけになっていて、その上は樹木の生い茂った小山である。与力といってもよほど内福の家であつたとみえて、湯殿はもちろん、米つき場までも出来ていて、大きい土蔵ふたとまが二戸前もある。こう書くとなかなか立派らしいが、江戸時代にもかなり住み荒らしてあつた上に、聞くところによれば、主人は維新の際に脱走して越後へ行つた。官軍が江戸へはいった時におとなしく帰順した者は、その家屋敷もすべて無事であつたが、脱走して官軍に抵抗した者は当然その家屋敷を捨てて行かなければならない。そこで、この主人は他の脱走者の例にならつて、その屋敷を多年出入りの商人にゆずり渡して行つたのである。この場合、ゆずり渡しというのは名義だけで、大抵はただでくれて行く。それに対して、貰つた方では饒別せんべつとして心ばかりの金を贈る。ただそれだけのことで遣り取りが済んだのであるが、明治の初年にはこんな空屋敷をかう者もない。借りる者も少ないので、新しい持主もほとんど持てあましの形で幾年間を打捨てて置いた。

こういう事情で建ちぐされのままになっていた空屋敷を、わたしの父がやすく買取つて、それに幾らかの手入れをして住んでいたのであるから、今から考えるとあまり居ごころのよい家ではなかつたらしい。第一に屋敷がだだっ広い上に、建物が甚だ古いと来ているから、なんとなく陰気で薄っ暗い。庭も広過ぎて、とても掃除や草取りが満足には出来そうもないというので、庭の中程に低い四目垣よつめがきを結つて、その垣の内だけを庭らしくして、垣の外はすべて荒地にして置いたので、夏から秋にかけてはすすきや雑草が一面に生い茂つている。万事がこのていであるから、その荒涼たる光景は察するに余りありともいふべきであるが、その当時は東京市中にもこんな化物屋敷のような家がたくさんに見いだされたので、世間の人も居住者自身も格別に怪しみもしなかつたらしい。

わたしの家ばかりでなく、周囲の家々もまず大同小異といった形で、しかも一方には山や森をひかえているのであるから、不用心とか物騒とかいうことは勿論であると思わなければならぬ。人間ばかりでなく、種々の獣けものも襲つてくるらしい。現に隣りの家では飼ひ鶏をしばしば食い殺された。それは狐か貉むじなの仕業であろうということであつた。夕方のうす暗いときに、なんだか得えたい体のわからない怪獣がわたしの家の台所をうかがつていたといつて、年のわかい女中が悲鳴をあげて奥へ逃げ込んで来たこともあつた。夏になると、蛇

がむやみに這い出して、時には軒先からぶらりと長く下がって来ることがある。まったく始末におえない。

前置きが少し長くなつたが、これらの話はそういう場所で起つたものであると思つて貰いたい。その年の八月、西郷隆盛がいよいよ日ひゆうが向の国に追ひ籠められたという噂が伝えられた頃である。わたしの家の庭内で毎晩がさがさという音が聞えるというので、女中たちはまた怖がりはじめた。なんでも夜がふけると、人か獣か、庭内を忍びあるくというのである。その当時、わたしの家庭は父と母と姉とわたしと、ほかに女中二人であつたが、姉とわたしは子供と赤ん坊であるから問題にはならない。男というのは父ひとり、ほかはみな女ばかりであるから、なにかの事があると一倍に騒ぎ立てるようになる。それがうるさいので、父ももう打捨てては置かれなくなつた。

「おおかた野良犬でも這い込むのだろう。」

こうは言いながらも、ともかくもそれを実験するために、父はひと晩眠らずに張はりばん番していた。それには八月だから都合がいい。残暑の折柄、涼みがてらに起きていることにして、家内の者はいつものように寝かして置いて、父ひとりが縁側の雨戸二、三枚を細目にかけて、庭いっばいの虫の声を聞きながら、しずかに団扇うちわを使つていた。まだその頃

のことであるから、床とこの間には昔を忘れぬ大小が掛けてある。すわといえはそれを引っさげて跳り出すというわけであった。

ことしはかなりに残暑の強い年であったが、今夜はめずらしく涼しい風が吹き渡って、更けるに連れて浴衣一枚ではちつと涼し過ぎるほどに思われた。月はないが、空はあざやかに晴れて、無数の星が金砂きんすなご子のようにきらめいていた。夜ももう十二時を過ぎた頃である。庭のどこかでがさがさという音が低くひびいた。それが夜風になびく草の葉ずれでないと覺さとつて、父は雨戸の隙き間から庭の方に眼をくばっていると、その音は一カ所ではなく、二カ所にも三カ所にもきこえるらしい。

「獣だな。」と、父は思った。やはり自分の想像していた通り、のら犬のたぐいが忍び込んで何かの餌をあさるのであろうと想像された。

しかし折角こうして張番している以上、その正体を見届けなければ何の役にも立たない。そうして、その正体をたしかに説明して聞かせなければ、女どもの不安の根を絶つことは出来ない。こう思つて、父はそつと雨戸を一枚あけて、草履をはいて庭に降りた。縁の下には枯れ枝や竹切れがほうり込んであるので、父は手ごろの枝を持ち出して静かにあるき始めた。庭には夜露おがもう降りているらしく、草履の音をぬすむには都合がよかつた。

耳をすますと、がさがさという音は庭さきの空地の方から低く響いてくるらしい。前にもいう通り、ここは四目垣を境にしてただ一面の藪のようになつていたので、人の丈たけよりも高いすすきの葉に夜露の流れで落ちるのが暗いなかにも光ってみえる。父は四目垣のほとりまで忍んで来て、息をころして窺うと、あたかもその時、そこらの草むらがざわざわと高く騒いで、忽ちにきやつという女の悲鳴がきこえた。

女の声は少しく意外であつたので、父もぎよつとした。しかしもう猶予はない。父は持つている枝をとり直して、四目垣をまわつて空地へ出ると、草むらはまた激しくざわざわ揺れてそよいだ。すすきや雑草をかきわけて、声のした方角へたどつて行つたが、ふだんでもめつたにはいつたことのない草原で、しかも夜なかのことであるから、父にも確かに見当けんとうはつかない。父は泳ぐような形で、高い草のあいだをくぐつて行くと、俄かに足をすべらせた。露にすべつたのもなく、草の蔓つるに足を取られたのでもない。そこには思いも付かない穴があつたのである。はつと思う間に、父はその穴のなかに転げ落ちてしまつた。

落ちると、穴の底ではまたもきやつという女の声がきこえた。父がころげ落ちたところには、人間が横たわっていたらしく、その胸か腹の上に父のからだがり落ちたので、それ

に圧しつぶされかかった人間が思わず悲鳴をあげたのである。その人間が女であることは、その声を聞いただけで容易に判断されたが、一体どうしてこんなところに穴が掘ってあったのか、またそのなかにどうして女がひそんでいたのか、父にはなんにも判らなかつた。

「あなた誰ですか。」と、父は意外の出来事におどろかさねながら訊いた。

女は答えなかつた。あたまの上の草むらは又もやぎわざわと乱れてそよいだ。

「もし、もし、あなたは どうしてこんな所にいるんですか。」

女が生きていることは、そのからだの温か味や息づかいでも知られたが、かの女は父の問いに対してなんにも答えないのである。父はつづけて声をかけてみたが、女は息を殺して沈黙を守っているらしかつた。

なにしろ暗くてはどうにもならない。ここから家内の者を呼んでも、よく寝入っている女どもの耳に届きそうもないので、父はともかくもその穴を這い出して家からあかりを持つて来ようと思つた。探つてみると、穴の間口はさほどに広くもないが、深さは一間半ほどに達しているらしく、しかも殆んど切つ立てのように掘られてあるので、それから這いあがることは頗る困難であつたが、父は泥だらけになつてまず無事に這い出した。そのとき草履を片足落したが、それを拾うわけにもいかなないので、父は片足に土を踏んで元の

縁先まで引つ返して来た。

## 二

父に呼び起されて、母や女中たちも出て来た。

「早く蠟燭ろうそくをつけてこい。」

裸蠟燭に火をつけて女中が持つて来たのを、心のせくままに父はすぐに持ち出したが、その火は途中で夜風に奪われてしまった。父は舌打ちしてまた戻つて来た。

「はだか蠟燭ではいけない。提灯をつけてくれ。」

母は奥へかけ込んで提灯を持ち出して来た。それに蠟燭の火を入れて、父は再び現場へ引つ返したが、さてその穴がどの辺であったか容易に判らなくなった。ひと口に空地といつても、ここだけでも四百坪にあまつていて、そこら一面に高い草が繁っている。さつきは暗やみを夢中で探り歩いたのであるから、どこをどう歩いたのか判らない。倒れている草をたよりにして、そこかここかと提灯をふり照らしてみると、そこにもここにも草の踏み倒された跡があるので、いつこに見当がつかない。と思ううちに、父は又もや足をふ

みはずして、深い穴のなかに転げ落ちた。

落ちると共に蠟燭の火は消えてしまったので、父はさっきの困難を繰り返さなければならぬことになった。ようやく這いあがったものの、あたりが暗いので何が何やらよく判らない。父は又もや引つ返して蠟燭の火を取りに行った。

「もう今夜は止して、あしたのことにとしたらどうです。」と、母は不安らしく言った。

しかし、かの穴には女が横たわっている。それをそのままにしては置かれないので、父は強情に提灯を照らして行つたが、かの穴はどこらにあるのか遂に見いだすことは出来なかつた。暗やみで確かに判らなかつたが、父が最初に落ちた穴と、二度目に落ちた穴とは、どうも同一の場所ではないらしかつた。第二の穴には人間らしいものももちろん横たわつていなかつたのである。それから考えると、この草原には幾力所かの穴が掘られているらしいが、それが昔から掘られてあるのか、近頃新しく掘られたのか、又なんのために掘られたのか、父にはちつとも判らなかつた。

「あの女はどうしたろう。」

それが何分にも気にかかるので、父は根よく探して歩いたが、どうしてもそれらしいものを見いだせないばかりか、よほど注意していたにもかかわらず、父はさらに第三の穴に

転げ落ちたのである。提灯は又もや消えた。

「畜生。おれは狐にでも化かされているのじゃないかな。」

まさかとも思いながらも、再三の失敗に父はすこし疑念をいだくようになった。

「もう思い切つて今夜は止めよう。」

父は第三の穴をはいあがつて家へ引つ返した。すすきの葉で足や手さきを少し擦り切つただけで、別に怪我というほどの怪我はしなかったが、三度もおとし穴に落ちたのであるから、髪の毛にまで泥を浴びていた。父は素裸になって、井戸端で頭を洗い、手足を洗つた。

「まったく狐の仕業かも知れませぬね。」と、母は言った。

父ももう根負けこんがして、そのままおとなしく蚊帳のなかにはいった。しかもかの女のことがどうも気になるので、夜の明けるまでおちおちとは眠られなかった。

夜は明けても今朝は一面の深い霧もやが降りおりていて、父の探索を妨げるようにも見えた。それが晴れるのを待ちかねて、父は身ごしらえをして再びゆうべの跡をたずねると、草ぶかい空地のまん中から少しく西へ寄つたところに、第一の穴を発見した。それが最初にこぼり込んだ穴であることは、片足の草履が落ちているのを見て証拠立てられたが、そこに女

のすがたは見えなかった。それからそれへと探しまわると、五百坪ほどの空地のうちに都合九カ所の穴が掘られていることが判った。そのうちの二カ所は遠い以前に掘られたものらしく、穴の底から高い草が生え伸びていたが、他の七カ所は近ごろ掘られたもので、その周囲には新しい土が散乱していた。しかもその穴を掩うために大きな草をたくさん積み横たえて、さながら一種の落し穴のように作られているのが父の注意をひいた。

「なんのために掘ったのでしようねえ。」と、父のあとから不安らしくついて来た母が言った。

何者がこんなことをしたのかはもとより判らないが、一体なんの為にこんなことをしたのかを、父はまず知りたかった。落し穴の目的とすれば、こんな所に穴を掘るのもおかしい。たとい草原同様の空地であるとしても、ここはわたしの家の私有地で、他人がみだりに通行すべき往来ではない。そこへ毎夜忍んで来て落し穴を作るなどは、常識から考えてちよつと判断に苦しむことである。それにしても、その落し穴に落ちたらしいかの女は何者であろうか。おそらく父が引つ返して提灯を持って来るあいだに、そこを這い出して姿をかくしたのであろうが、その当時二、三カ所でがさがさという響きを聞いたのから考えると、かの女のほかにも何者かが忍んでいたのかも知れない。あるいは近所の男と女が

この空地を利用して密会していたのではあるまいか。かれらは何かに驚かされて、あるいは父の足音におどろかされて、あわてて逃げようとするはずみに、女はあやまってかの穴に転げ落ちたのではあるまいか。それでまず女の解釈は付くとしても、かの落し穴のようなものは何であろうか。あるいは彼等がそこで密会することを知って、何者ががいたずら半分にそんな落し穴を作って置いたのであろうか。

こう解釈してしまえば、それは極めてありふれた事件で、単に一場の笑い話に過ぎないことになる。父もそう解釈して笑ってしまいたかったが、その以上に何かの秘密がひそんでいるのではないかという疑いがまだ容易に取りのけられなかった。そればかりでなく、ともかくも自分の所有地へ入り込んで、むやみに穴を掘ったりする者があるのは困る。いずれにしても、今夜ももう一度張番して、その真相を確かめなければならぬと、父は思った。

父は官吏——その時代の言葉でいう官員さんであるので、そんな詮議にばかり係り合つてはいられない。けさも朝から出勤して夕方に帰って来たが、留守のあいだに別に変つたことはなかった。今夜も家内の者を寝かしてしまって、父ひとりが縁側に坐っていると、ゆうべ碌ろくに眠らなかつたせいか、十二時ごろになると次第に薄ら眠くなつて来た。き

ようも暑い日であったが、更ふけるとさすがに涼しい夜風が雨戸の隙間から忍び込んで来る。それに吹かれながら、父は縁側の柱によりかかって、ついうとうと眠ったかと思うと、また忽ち眠りをさまされた。例の空地の草むらの中で、犬のけたたましく吠える声が聞えるのであった。つづいて女の悲鳴が又きこえた。

雨戸をあけて、父は庭先へ跳り出た。ゆうべの経験によつて今夜は提灯を用意して行つたのである。片手には提灯、かた手には木の枝を持つて、四目垣をまわつて駈けていくあいだにも、犬は狂うように吠えつけていた。その声をしるべにして、父は草むらをかき分けて行くと、犬は提灯の光りをみて駈けよつて来た。

その当時、英国の公使館が私の家の隣りにあつて、その犬は何とかいふ書記官の飼犬である。犬は毎日のようにわたしの庭へも遊びに来て、父の顔をよく知っている。この提灯を持った人に対しては別に吠え付こうともしなかつたが、それでも父の前に来て子細ありげに低く唸つていた。父は犬にむかつて、手まねで案内しろといった。犬はその意をさとつたらしく、又もや頻りにそこらを駈け廻つていたので、父もそのあとに付いて駈けあるいていると、犬はひとむら茂るすすきの下へ来て、前足ですすきの根をかきながら又しきりに吠えた。急いで近寄つて提灯を差し付けると、そこにも一つの穴があつて、

その穴から一人の大男があたかも這い上がって来た。

よく見ると、それは公使館付きの騎兵で、今は会計係か何かを勤めているハドソンという男であった。彼は手にピストルを持っていた。

「今夜は犬がひどく吠えます。」と、ハドソンは明快な日本語で言った。「わたくし見まわりにまいりました。こちらの藪のなかに人が隠れておりました。その人は穴を掘っております。わたくし取押えようとしませんが、その人逃げました。わたくし穴に落ちました。」

「その人、男ですか、女ですか。」と、父は訊いた。

「暗いので、それ判りません。」と、ハドソンはからだの泥を払いながら答えた。

二人はしばらく黙って露の中に突っ立っていた。犬はまだ低くうなっていた。ハドソンはおそらく泥棒であろうといったが、泥棒がなぜ幾つもの穴を掘るのか、それが解きがたい謎であった。

あくる朝になって父は再び空地を踏査すると、なるほど新しい穴がまた一つふえていた。ハドソンの落ちたのは古い穴で、彼はそんな穴が幾つも作られていることを知らないで、一昨夜の父とおなじような目であったのである。

何者がなんのためにここへ来て、根こんよく幾つもの穴を掘るのか、父はいよいよその判断に苦しめられた。そこで、ハドソンと相談して、今夜はふたりが草むらの中に隠れている事になると、年の若い英国の騎兵はこの探検に興味を持っていろいろ、宵のうちから草むらに忍んでいて、なにかの合図には口笛を吹くといった。しかも十時を過ぎる頃まで彼の口笛はきこえなかった。家内の者を寝かしてから、父も身支度して空地へ出張したが、今夜は風のない夜で、草の葉のそよ音さえも聞えなかった。二人は夜露にぬれながら徒らいたずらに一夜をあかした。

「奴等やつらも警戒して迂濶に出て来ないのだろう。」と、父は思った。第一の夜には父に追われ、第二の夜には犬に追われ、かれらも自分たちの危険をおもんばかって、ここへ近寄ることを見合せたのであろう。常識から考えても、そうありそうなことである。

ハドソンはその後三晩も張番をつづけたが、遂になんの新発見もなかった。父は夜露に打たれた為に少しく風邪を引いたので、当分は張番を見合わせる事になった。それでも毎朝一度ずつは空地を見廻つて、新しい穴が掘られているかどうかを調べていたが、最初に

発見された九カ所と後の一カ所と、その以外には新しい穴は見いだされなかった。かれらもこのいたずら——まずそうらしく思われる——を中止したらしかった。

それから半月あまり無事に過ぎた。その以来、家内の女たちをおびやかすような怪しい響きもきこえなくなつて、この問題も自然に忘れられかけた時に、父はふとあることを思いついた。それはあたかも日曜日の朝であつたので、父はすぐに近所の米屋をたずねた。米屋は前にいったような事情で、わたしの家を昔の持主から譲りうけて、更にそれをわたしの父に売り渡したのである。そうして、現在もわたしの家に米を入れている。その米屋の主人に逢つて、昔の持主のことをたずねると、主人はこう答えた。

「その節も申上げましたが、あなたのお屋敷には安達あだちさんというお武家が住んでいらしたのでございますが、そのお方は脱走して、越後口で討死をなすつたということでございます。」

「その安達という人の家族はどうしたね。」と、父はまた訊いた。

「どうなすつたか判りませんが、ひと月ほども前に、その奥さんがふらりと尋ねておいでになりました、なんでも今までは上総かずさの方とかにおいでになつたというお話でした。そうして、わたしの家には誰が住んでいるとお聞きになりましたから、矢橋さんという方

がお住まいになつていと申しましたら、そうかといってお帰りになりました。」

「その奥さんは今どこにいるのだろう。」

「やはり同区内で、芝の片門前かたもんぜんにいるとかいうことでした。」

「どんなふうをしていたね。」

「さあ。」と、主人は気の毒そうに言った。「ひどく見ずばらしいという程でもございませんでしたが、あんまり御都合はよくないような御様子でした。」

「奥さんは幾つぐらいだね。」

「瓦解がかいの時はまだお若かつたのですから、三十五ぐらいにおなりでしょうか。」

「子供はないのですかね。」

「お嬢さんが一人、それは上総の御親戚にあずけてあるとかいうことでした。」

「片門前はどの辺か判らないかね。」

「さき様でも隠しておいでのようにしたから、わたくしの方でも押し返しては何いませんでした。」

それだけのことを聞いて、父は帰った。父の想像によると、庭の空地へ忍んで来て、一度は穴に落ち、一度は犬に追われた女は、この安達の奥さんであるらしく思われた。勿論、

取留めた証拠があるわけではないが、庭の空地に穴を掘るのは単にいたずらの為にするのではない。おそらくは土を掘りかえして何物かを探し出そうとするのであろう。安達の家には何かの伝説でもあるか、あるいは脱走の際に何かの貴重品でもうずめて立去ったか、二つに一つで、それを今日こんにちになつてひそかに掘出しに来るのではあるまいか。今日では土地の所有権が他人に移っているのです、表向きに交渉するの面倒を避けて、ひそかに持ち出して行こうとするのではあるまいか。穴を掘るのは心あたりの場所を掘って見るのであろう。それが成功して幾度も取りに来るのか、あるいは不成功のために幾度もさがしに来るのか、それは判らない。また、かの女のほかに幾人の味方があるか、それも判らない。

もし果たしてそうであるとすれば、まことに気の毒のことである。自分は決して自己の所有権を主張して、遺族らの発掘を拒こぼんだり、あるいはその掘出し物の分け前を貰おうとしたりするような慾心を持たない。正面からその事情を訴えて交渉してくれば、自分はこころよくその発掘を承諾するつもりである。もしその住所がわかつていれば念のために聞合せるのであるが、片門前とばかりでは少し困る。父は再びかの米屋へ行つて、安達の奥さんという人が重ねて来たならば、その住所番地を聞きただして置いてくれと頼んだ。

それでも父はまだ気になつてならなかつた。米屋の主人の話によると、かの奥さんはあ

まり都合が好くないらしいという。してみれば、埋めてある財を一日も早く取出したいと思っているに相違ない。片門前は二町であるが、さのみ広い町ではない。軒別さがして歩いても知れたものであると、父はその次の日曜日に思い切つて探しに出た。広い町でないといつても、一丁目から二丁目にかけて軒別に探しまわるのは容易でない。父はほとんど小半日を費して、ついに安達という家を見いだし得ないで帰つた。あるいは他人の家に同居でもしているのではないかとも思われた。

この上は米屋の通知を待つのはなかつたが、安達の奥さんは再び米屋の店にその姿をみせなかつた。わたしの庭の空地へも誰も忍んで来る様子はなかつた。

それから又、半月あまりを過ぎて、九月はじめの新聞紙上に片門前の女殺しの記事があらわれた。森川権七という古道具屋の亭主がその女房のおいねを殺したというのである。

権七は三十一歳で、おいねは年上の三十七であつた。新聞の記事によると、おいねは旧幕臣の安達源五郎の妻で、源五郎は越後へ脱走するときに、中<sup>ちゆうげん</sup>間の権七に供をさせて妻のおいねと娘のおむつを上<sup>かみ</sup>総の親戚の方へ落してやったが、源五郎戦死の噂がきこえて後、おいねと権七の主従関係はいつか夫婦関係に変わってしまった。それには親戚の者どもの反対もあつたらしく、おいねは娘のおむつを置き去りにして、若い男と一緒に上総を駈落ち

して、それからそれへと流れ渡つた末に、去年の春ごろから東京へ出て来て、片門前に小さい古道具屋をはじめたのである。

権七は小才のきく男で、商売の上にも仕損じがなく、どうにか一軒の店を持ち通すようになる、かれは年上の女房がうるさくなつて来た。殊においねは旧主人をかさにきて、とかくに亭主を尻に敷く形があるので、権七はいよいよ気がさして来た。目と鼻のあいだには神明しんめいの矢場やばがある。権七はその若い矢取り女になじみが出来て、每晚そこへ入りびたっている、おいねの方でも嫉妬に堪えかねて、夫婦喧嘩の絶え間はなかった。

その晩もいつもの夫婦喧嘩から、一杯機嫌の権七は、店にならべてある商売物のなかから大工道具の手斧ちようなを持ち出して、女房の脳天を打ち割つたので、おいねは即死した。権七もさすがに驚いてどこへか姿をかくした。

安達の奥さんの消息はこれで判つた。古道具屋の店は森川権七の名になっているので、父がさがし当てなかつたのも無理はなかつた。二、三日の後に、父が米屋の主人に逢うと、主人もこの新聞記事におどろいていた。

「権七という中間はわたくしも知っています。上州の生れだとか聞きましたが、小作りのこづく小粋な男でした。あれが御主人の奥さんと夫婦になつて……。おまけに奥さんをぶち殺す

なんて……。まったく人間のことは判りませんね。」と、主人は歎息していた。

九月の末に大あらしがあつた。午後から強くなつた雨と風とが宵からいよいよ烈しくなつて、明け方まであれた。殊にここらは品川の海に近いので、東南の風はいつそう強く吹きあてて、わたしの家の屋根瓦もずいぶん吹き落された。庭の立木も吹き倒された。塀も傾き、垣もくずれた。

しかし東の白らむ頃から雨も風もだんだん鎮まつて、あくる朝はうららかに晴れた日となつたが、どこの家にも相当の被害があつたらしい。父は自分の家の構え内を見まわつて歩くと、前にいつた立木や塀の被害のほか、西側の高い崖がくずれ落ちてゐるのを発見した。幸いにその下は空地であつたが、もしも住宅に接近していたらば、わたしの家は潰されたに相違なかつた。

早速に出入りの職人を呼んで、くずれ落ちた土を片付けさせると、土の下から一人の男の死体があらわれた。男は崖くずれに押し潰されて生き埋めとなつたのである。かれは手に鋏くわを持っていた。警察に訴えてその取調べをうけると、生き埋めになつた男は、女房殺しの森川権七とわかつた。

権七はかの事件以来、どこかに踪跡そうせきを晦くらましていたのであるが、どうしてここへ来てこんな最期を遂げたのか、だれにも想像がつかなかった。

「やっぱりわたしの想像があたつていたらしい。」と、父は母にささやいた。

空地の草原へ穴を掘りに来た者は、おそらく権七とおいねであつたろう。父が想像した通り、かれらは何かの埋蔵物を掘出すために、幾たびか忍んで来たらしい。権七は女房を殺して、どこにか姿を隠していながらも、やはりかの埋めたるものに未練があつて、風雨の夜を幸いに又もや忍び込んで来て、今度は崖の下を掘っていたらしいことは、かれの手にしていた鍬によつて知られる。しかも風雨はかれに幸いせずして、かえつて崖の土をかれの上に押し落したのであつた。

これらの状況から推察すると、かれらは遂に求むるものを掘出し得なかつたらしい。それが金銀であるか、その他の貴重品であるか、勿論わからない。父はかれらに代つて、それを探してみようとも思わなかつた。

明治十年——今から振り返ると、やがて五十年の昔である。あの辺の地形もまつたく變つて、今では一面の人家つづきとなつた。権七夫婦が求めていた掘出し物も、結局この世にあらわれずに終るらしい。





# 青空文庫情報

底本：「蜘蛛の夢」光文社文庫、光文社

1990（平成2）年4月20日初版1刷

初出：「写真報知」

1925（大正14）年9月

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：花田泰治郎

2006年5月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

# 穴

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>